



桶川市立桶川中学校
学校だより 第3号
令和8年6月4日



自立への通り道

校長 小高 剛

木々の緑はより一層濃く生い茂り、夏らしい景色となりました。

さて、学校保健安全法に基づき、発育測定や歯科健診などの健康診断を行いました。中でも発育測定は自身の成長を実感できるよい機会の一つでしょう。多くの人にとって、中学校時代は生涯において、身体が最も成長する時期です。そして、身体の発達が著しい思春期には、思春期特有の心模様が見られます。

まず、具体的な物が目の前になくても、ある程度の論理的な思考が可能になります。その結果、客観的な判断ができるようになり、それまで何の疑問も感じなかったことに反発したり、社会の矛盾に気付いたりするようになります。そして、身体が大人に近付くと、「自分はもう子供ではない」という意識が生まれます。もちろん、「子供ではない」＝「大人である」というわけではなく、社会的にも法的にも様々な制限がありますが。

この時期は、周囲に対して反抗的な言動を見せることから、「反抗期」と呼ばれます。言葉の響きから、悪いことのように感じられるかもしれませんが、反抗期は精神的な自立のために必要なことだと言われています。

ところが、反抗期が見えない子供もいます。発達心理学によると、反抗期が見えない親子関係には例えば次のようなタイプがあるそうです。

○親が支配する過干渉タイプ：生活の全てが親の意のままに育った子供は、それに慣れきってしまい反抗できない。

○葛藤がない甘やかしタイプ：子供は欲しいもの全てが与えられ、我慢を強いられることがないため、反抗の必要性がない。

これら以外のタイプも示されていますが、こういった子供たちは将来、自分で考えたり決断したりする能力が発達しなかったり、自立できなかったりする傾向があるそうです。子供は自分の主張が親の主張とぶつかり、反抗することで自立していきます。そう考えると、反抗期は成長の通り道で、「自立期」と呼べるのかもしれませんがね。

子供たち自身にも、自立期というものを受け止めて、自分で考えることや社会的自立を意識しながら、この時期を乗り越えていってほしいと思います。

子供は親にとってはいつまでも子供ですが、子供自身はいつまでも子供のままではなく、一人の自立した大人へと歩みを進めています。私たち大人は、思春期特有の状況を理解して受け止め、発達段階に応じて接することで、子供のよりよい成長を支えたいものです。